

イギリス国語科メディア教科書における 写真読解単元の考察

— 単元「Photo-You」(The Media Book, EMC, 2001) を中心に —

羽 田 潤

(2011年10月6日受理)

A Study of Media (Photo) Literacy in English Media Student Book
— A case of unit “Photo-You” (The Media Book, EMC, 2001) —

Jun Hada

Abstract: This paper intends to explore teaching strategies of multimodal literacy (cf. media literacy, photo-literacy, moving image literacy, and digital literacy) in the Japanese classroom as a mother tongue, in order to develop multimodal literacy education in the Japanese language education curriculum. Thorough consideration will be given to unit ‘Photo-You’ at “The Media Book”, which the English & Media Centre in U.K., published 2001. Unit ‘Photo-You’ is a unit to learn a documentary. In particular I show very effective technique when the beginning unit that used a portrait elaborates a plan by the language activities that we used a photograph for Japanese language education.

Key words: media literacy education, photograph, multimodal text, England
キーワード：メディア・リテラシー教育, 写真, マルチモーダル・テキスト, イギリス

1. はじめに

1.1. 研究の目的・方法

子どもをとりまく社会の変化の激しさは、近年の高度情報通信化社会の進展により、劇化の一途を辿っている。諸外国に於いてはすでにメディア社会への対応に先んじており、多様なメディアの学習が導入されている。機器の発達や普及度に勝る我が国において、そのリテラシー教育が遅れをとっている点は否めない。早急に対策を講じる必要があると考える。諸外国のなかでもイギリスは、国語科教育の枠組みで先進的な取

り組みが行われており、多くを学ぶことができそうである。

本稿では、イギリスにおけるメディア・リテラシー教育の方法を我が国に導入することを目的に、①メディア・リテラシー教育に関わるカリキュラム、②カリキュラムの具体としての教科書、③メディア・リテラシー教育の実践について考察・検討を行う研究の一環として、イギリス国語科メディア教科書“The Media Book” (Jenny Grahame¹⁾, Kate Domaille²⁾, English & Media Centre, 2001) を取り上げる。

“The Media Book”は、イギリス国語科ナショナル・カリキュラム (1999)³⁾ (以下「NC」) の実施細目とも言うべき“Key Stage 3 National Literacy Strategy Framework for Teaching English Years 7-9 (2001)”⁴⁾ (以下「NLS」) 対応教科書として、English & Media Centre⁵⁾ から、English & Media Centre Key Stage 3⁶⁾

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：吉田裕久 (主任指導教員), 池野範男,
山元隆春

シリーズ⁷⁾として刊行された5冊本(“The Fiction Book”, “The Non-Fiction Book”, “The Media Book”, “The Poetry Book”, “The Drama Book”)の1冊である。

本教科書の単元を考察することで、カリキュラムにおけるメディア・リテラシーの目標を達成するため、どのような学習活動(教材及び発問)が効果的であるのかがあきらかになる、と考える。特に、言語外メディアを国語科で扱う際の、目標のおき方、言語活動の設定の仕方があきらかになり、言語外メディア、特に写真を国語科で導入しつつある我が国の国語科教育の方法に関して大きな示唆が得られると考える。

1.2. 研究の背景

メディア・リテラシー教育の概念を国語科教育に導入するに当たり、最も議論の中心となったのは、言語外メディアを「読むこと」の対象として導入することの是非である。瀧口(2011)⁸⁾が検証したように、戦前・戦後の国語科教育には、視聴覚教材の導入が行われていたが、主に「書くこと」における利用であり、「読み」の対象としての視聴覚教材については慎重な態度が貫かれていた。しかし、PISA調査(2003)以降、国語科において育むべきリテラシーの範囲についての議論は大きく変化した。なかでも、非連続型テキストの読解が読解リテラシー(Reading Literacy)の範疇として示されたことを受け、新学習指導要領及び解説編にも言語外メディア(写真等)及び複合型メディア(新聞等)の文言が記載されることとなった⁹⁾。そこで、メディア・リテラシー実践は、PISA型読解力の枠組みを活用しつつ、言語外メディアと言語メディアが融合して表出する「読み」を国語科の範疇として扱うことが可能になったのである。日常的、社会的なテキストを教材とすることで、「生きて働く言葉の力」としてのリテラシー育成の重要性が強く認識されたといえよう。学習指導要領の変化は、平成23年度版小学校教科書教材に如実に表れ、写真、絵、図表等を活用した言語活動が多く掲載されることとなった¹⁰⁾。

しかし、学習指導要領及びこれら教材も、写真、絵、図表が多く盛り込まれているにも関わらず、言語外メディアを「読む」という観点に関しては、直接的に踏み込んでいない。国語科の学習の中に、言語外メディアを「読む」という観点を導入しなければ、こうした教材もうまく活用されずに終わる可能性がある。

イギリスは、国語科のカリキュラムに言語外メディアを含む国である¹¹⁾。カナダ・オンタリオ州や西オーストラリア州が「見ること(viewing)」という領域を設けているのに対し、イギリスは、我が国と同様の領域設定の中に、「マルチモーダル・テキスト(multimodal

text)」¹²⁾との文言を用いており、我が国の新たなリテラシーカリキュラムを確立するうえで、大変参考になるカリキュラムである。

これら言語外メディアの国語科カリキュラムへの導入に大きな影響力を持ったのが、英国映画研究所(BFI)¹³⁾とEnglish & Media Centreである。なかでも、English & Media Centreは、カリキュラム対応の義務教育段階の国語科教材を多数刊行し、特に、メディア・リテラシー教育の理念とカリキュラムとその具体を知るうえで価値ある資料を提供してくれる機関である。

これまで、言語外メディアの国語科教育への導入を検討するため、“The Media Book”の9つある大単元の分析を行なった¹⁴⁾。その中で、最も我が国に導入可能だと考えられたのが、写真及びドキュメンタリーの読解を目的とした大単元6「Photo-You」である。そこで、以下、写真読解単元「Photo-You」を対象に、その目標、内容、方法をあきらかにしていく。

2. The Media Bookの背景と概要

2.1. The Media Bookの編集方針

編著者のひとりであるJenny Grahameは、長年、内ロンドンの総合制中等学校(comprehensive school)で「メディア」を教えており、1987年にEnglish & Media Centreにメディア・コンサルタントとして就任して以来、国語科やメディア・スタディズ等の枠組みで、「メディア」をどのように教えるかを提案してきた人物である。これまで筆者は、“The Media Book”の考察を行ってきた¹⁵⁾が、Grahame自身の意図を探る作業については課題となっていた。しかし、2010年11月、Media Literacy Conference 2010に参加するために訪れたロンドンで、松山雅子が行ったGrahameへのインタビューに同席する機会を得、“The Media Book”についても質問することができた。

English & Media Centre Key Stage 3シリーズの「売り」は「NLS」への対応であるが、Grahameは、以下のように述べている。

「National Literacy Strategy」に即しているわけですが、もちろん、同時に意図的に距離をおいて編集しました。「NLS」で、言っている内容に対して、私たちはなんの異論もありません。けれども、私どもはその教えられ方、指導の仕方には大変異論を感じています。非常に型にはまった形で、すべて紙を中心とした授業になってしまっていて、非常に標準化された、あまりにも組織立てられた教授法で、一つの指導項目、評価事項にチェックを つぎつぎ入れて消化していくといった機械的なところも多い。こ

の単元ではこれとこれとこれをしなさいと、自分のやったことを項目付けていく感じですね。そして、すべての到達目標を考慮しなくてはならないと推奨してくるわけです。われわれはそういった教授法の在り方を好ましいとは思いませんでした。(中略—引用者) ともかくにも国語科の授業の中で使えることは変わりありません。なぜかといえば、すべての活動が談話だとか、書いたりだとか、言語活動と深く結びついたものばかりだからです。だけれども、国語科の言語能力を伸ばすということのみならず、より幅広く活用されることを望んでいるわけです。¹⁶⁾ 「NLS」への対応については、これまでの考察においても、対応させてはいるものの、従来のメディア学習¹⁷⁾の方法論に則った学習を提示しており、「NLS」を強く意識して構成されたわけではないとの結論を出していたが、Grahameの言葉によってそのことが証明された。メディア学習自体はこれまでも多様な言語活動を保証する方法論をとっていた。特に、表現することで理解するという学習法、具体的には、制作者の立場になってロールプレイやシミュレーションを行う学習法は、メディア学習の中でも中心的な活動であり、「The Media Book」も同様の方法で学習活動が提示されている。これについては、Grahameとの共著¹⁸⁾も多く、イギリスのメディア・リテラシー教育を牽引するBuckingham¹⁹⁾が、効果的なメディア・リテラシー教育には、「制作」「言語」「オーディアンス」「リプレゼンテーション」の「4つの基本概念」の学習が不可欠であると提言しており、「The Media Book」の大単元4から大単元6(資料1)が、「4つの基本概念のすべてに統合的、全体論的に取り組もうとしている」²⁰⁾と評価している。

資料1 “The Media Book”の単元構成

	大単元タイトル	中単元数	頁数
第7学年	1 『Out』-動画(短編映画)をよむ	3	7
	2 『テレタビーズ』に取り組み-幼児向けテレビ番組の場合	5	15
	3 『Home Away From Home(故郷から遠く)』-短編映画と物語	5	11
第8学年	4 『シンプソンズ』(テレビアニメ番組)を研究する-テレビ文化	8	20
	5 Selling You(th)-若者に向けた広告活動	5	15
	6 『Photo-You』-ドキュメンタリー単元	5	13
第9学年	7 有名人(セレブリティ)!-メディアの問題を調査する	5	15
	8 『Big Brother』(視聴者参加型体験バラエティ) TV-クロス・メディアの場合	4	14
	9 『Patterns』-映画と表現	6	13
	計	46	127

2.2. The Media Bookの単元と教材

資料1には、9つの大単元タイトル、各大単元の中単元数、頁数をまとめた。ひとつの大単元でひとつの映像作品(またはジャンル)を扱う形式である。教師用指導書では、収録されている9つの大単元を1学年に3つずつ行うことが奨励されている。各単元には、「NLS」における到達目標との関わりが明示され、授業時数に応じて、到達目標のレベルを変えており、各学校の状況に配慮したものとなっている。大単元1「OUT」の場合、短期計画バージョンでは、1週目に2つの中単元、2週目に最後の単元というように、最短3時間の設定となる。

教材の軸は付属のDVDに収録²¹⁾されている映像作品である。これら映像作品の教材特性を考察した結果、共通する特徴を見出すことができた。①家族または疑似家族が登場、②現実の再構成を意識させやすい内容または原作が事実に基づいている、③フィクションとノンフィクションの境目が曖昧な演出法がとられている、④登場人物の何らかの「喪失」が描かれる、⑤冒頭が全体を象徴するという特徴が強く表れている、⑥台詞が少なく(『シンプソンズ』をのぞく)、場の感情や雰囲気画面演出や音楽で強調している。

読解対象としての作品が以上のような特徴を持つことで、Buckinghamの「4つの基本概念」の枠組みが捉えやすくなると考えられる。くわえて、特に「家族」を扱うことは、学習者に、自分は何者であり、どのような価値観・意見を持つ人物なのかを自己認識させることに繋がると考えられる。

今回考察対象としている大単元6「Photo-You」は、先述した、Buckinghamが「4つの基本概念のすべてに統合的、全体論的に取り組もうとしている」と評価する単元のひとつであり、また、第8学年の最終単元として、動画の読解学習の集大成ともいえる手法が示される単元でもある。その意味でも、イギリスにおけるメディア・リテラシー教育の具体を見るうえで価値ある対象といえよう。以下、大単元6「Photo-You」の具体を見ていく。

3. 大単元6「Photo-You」の学習活動

3.1. 「Photo-You」の目標

「The Media Book」では、各単元の冒頭に、「学習目標」が示される。「Photo-You」の場合は、以下のように示される。(資料2)

資料2 学習目標（“The Media Book” p.73を訳出）

この単元では以下のことを学習する

- ① 私たちはどのようにポートレートを写すか
- ② 短編ドキュメント映画をどのように分析するか
- ③ ドキュメンタリーテキストを作るときの、カメラマンや映画監督の判断について
- ④ 画像、音、言葉をお互いに組み合わせて意味を作り出すさまざまな手法について

大単元6「Photo-You」は、「ドキュメンタリー単元」とサブタイトルに示されており、ここでの目標は「ドキュメンタリー」というジャンルへの理解が軸になることが示されている。しかし、このようなメディア理解だけでなく、指導書²²⁾には、「NLS」の読む・書く・話す・聞く項目に幅広く対応していることが示され、写真を活用した学習活動を仕組むことで幅広い言語活動が保証されることを表している。例えば、資料3にまとめたように、ドキュメンタリー単元としての特徴は、「〈ii〉読解のためのよみ（Reading for meaning）」の「8. 情報が異なる形式やメディアに再話されるとき意味がどのように変わるか調査する。」「9. CGアニメーションで使われる音と画像のように、テクノロジーを使って表現される方法を確かめること。」に表れているが、その他の項目は、「メディア」にも「写真」にも「ドキュメンタリー」にも直接関わりのない、国語科共通の読解指導事項がこの単元における到達目標に充てられていることがわかる。とはいえ、先のGrahameの言葉を踏まえると、「NLS」に対応するために「Photo-You」（及び“The Media Book”）の言語活動が組織されたのではなく、Grahameがこれまで積み上げてきたメディア学習における言語活動を、「NLS」の項目に、貼り付けていったものである。

資料3 「Photo-You」における「NLS」の「読解」対応項目²³⁾

文章レベル〈A〉読解

生徒は以下のことがらを学ばなくてはならない。

- 〈i〉調査・スタディスキル（対応項目なし）
- 〈ii〉読解のためのよみ（Reading for meaning）
5. テキストに対するテーマ、価値、考えの展開をたどること。
6. 事実と仮説、理論または意見を区別して、意見の偏りと客観性を確かめること。
8. 情報が異なる形式やメディアに再話されるとき意味がどのように変わるか調査する。
9. CGアニメーションで使われる音と画像のように、テクノロジーを使って表現される方法を確かめること。

〈iii〉作家の創作手法の理解

10. 内容の組み合わせや使われている言語のパターンなどのように、どのように重要な考えが発展しているのか、テキストの全体的な構造を分析すること。

〈iv〉文学的テキストの研究（対応項目なし）

3.2. 「Photo-You」の単元構成

資料4に大単元6「Photo-You」の単元構成をまとめた。5つの中単元で構成されている。ポートレート読解(6-1)→ドキュメンタリー作品読解(6-2)→コメント制作(6-3)→ドキュメンタリー制作①(6-4)→ドキュメンタリー制作②(6-5)となっている。前半が読解活動、後半が表現活動となる。読解表現共に、ドキュメンタリーの軸に〈私〉が据えられている点が特徴といえる。切り取られる〈私〉や切り取る〈私〉を意識させることで、ドキュメンタリーもまた「演出」された「事実」であることを学ぶ単元構成となっている。

なかでも冒頭単元である「リジーのポートレート」は、写真の読解であると同時に、ドキュメンタリーというジャンルの理解に繋げていくための効果的な教材選択と学習活動が行われており、写真を活用した言語活動を構想するうえで最も参考になる単元である。以下、「リジーのポートレート」における写真活用の具体をあきらかにする。

資料4 大単元6「Photo-You」の単元構成

（各学習活動の見出しを訳出。数字は筆者）

中単元	学習活動タイトル
6-1 リジーのポートレート	(1) 次のページの写真は、リジーという、14才の少女のアルバムの写真です。
	(2) リジーのドキュメンタリー（グループ活動）
	(3) ドキュメンタリーを見せ合う（クラス活動）
	(4) 写真は真実を語るか？（宿題）
6-2 Photo-Youを探求する	(1) ドキュメンタリーについて考える（クラス活動）
	(2) 見る前に内容を予想する（グループ活動とビデオ視聴）
	(3) 第一印象について話し合う（グループ活動）
	(4) ドキュメンタリーは何をするのか？（クラス活動）
	(5) 『Photo-You』はどういう種類のドキュメンタリーか（クラス活動）
	(6) 『Photo-You』の物語を分解する（クラス活動）
	(7) 『Photo-You』を編集する（グループ活動とビデオ視聴）
	(8) お互いの物語を觀賞する（クラス活動）
	(9) 監督のアマングに手紙を書く（宿題）
6-3 コメント制作	(1) ドキュメンタリー映像（Oxford大学の卒業式風景）の実況解説をする
	(2) 実況解説を聞く（クラス活動）
6-4 どのように作るのかー提案を書く	(1) 自分自身が作るドキュメンタリーのアイデアを考える
	(2) 制作者のアイデアはどこまで最終的な作品に反映されたか（グループ活動）

6-5 シミュレーション: 「ある日の出来事…」	(1)「ある日の出来事」という5分のドキュメンタリーを考える
	(2)ドキュメンタリーを計画するーアプローチの方法を決定する(個人活動)
	(3)「ある日の出来事」を組み立てる(グループ活動)

3.3. 「リジーのポートレート」の学習活動

3.3.1. 教材選択の視点

“The Media Book”の教材選択の方法については、先述したように、「家族」が共通のモチーフになっていると考えていたが、Grahameに尋ねたところ、

それはおもしろい考え方ですね。まったくの偶然よ。確かにあなたのいうとおり、いわれてみれば、家族に関係していることが選ばれていることはおもしろい発見ですね。主たる注意点としては、この教科書は14歳、15歳という、高校生ではなく、中学生段階の学習者が扱うものであるために、取り組みやすい素材というものを集めたということが一番のポイントです。14歳、15歳が扱うために、あまりにも危険すぎることであるとか、あえて危険を押して素材をいれるといったことはしませんでした。11歳から14歳、年上ではなく、年下のティーエンジャーにしばらくこんでみました。でも決して、家族で集めよ

資料5 リジーのポートレート (“The Media Book” p.74より引用。丸数字は引用者が付したもの)



うとは思っていませんでした。²⁴⁾

との回答であった。大きなリアクションをとり、笑いを交えながら、「そんなことは考えもしなかったわ」と答える Grahame に、それ以上、詳しく聞くことはできなかった。中単元1「リジーのポートレート」では、リジーという少女とその家族が関わる写真(資料5)が教材として提示される。Grahameの反応は、家族性を全く意識しなかったという意味にもとることができるが、10代の少年少女の日常性を教材化しようとするときに「家族」が含まれてくることは、あえて意識することではなく、当然なことではないかという意味にもとることができる。

3.3.2. リジーの写真(ポートレート)

選ばれた写真は、現在14歳であるというリジーの生い立ちから切り取られた8つの瞬間である。8枚のポートレートを、後の活動で提示されるキャプションと併せて内容を確認していく。キャプションは、14歳のリジーが付けたものである。写真①は、リジーとリジーの妹である。キャプションは、「C5. 私とアニー。フォト・ブースで。」とあるように、証明写真機の中で撮られているため背景は真っ白である。写真②は、はにかんだ表情でどこかの家が後ろに写っている。キャプションは、「C6. 私と新しいトレーナー。とても古いファッションに見える。」。写真③は妹がかなり小さい。「C4. 妹に計算機の使い方を教えようとしているところ。でも、妹は全く興味なし。」。写真④ベッドで寝転ぶ姉妹。「C8. 休日の目覚め。」。写真⑤さらに小さな妹。「C3. 私と生まれて3日の妹。」。写真⑥赤ちゃん姿で男性に抱きかかえられている。「C1. これは、私と母の友人。彼らは、私が赤ちゃんのとき、エイリアンのようだったと思った。」。写真⑦サングラスをかけており、この1枚のみ白黒写真。「C7. このメガネ、覚えている。とってもクールだと思っていた…。」。写真⑧立ち姿の全身写真はこれ1枚。「C2. 私の新しい髪型を母が撮った写真。これは嫌い。」

以上の8枚である。仮に年齢を推測して順に並べてみるとするならば、写真⑥(1歳)、写真⑦(6歳)、写真⑤(7歳)、写真③(8歳)、写真④(10歳)、写真②(11歳)、写真⑧(13歳)、写真①(14歳)になると考えられる²⁵⁾。

写真は、ポートレートの名の通り²⁶⁾、リジーを中心に据えた、私的空間、または私的に近い空間でのみ撮られた写真が選ばれている。学校や、本人の友人といった公の場は提示されない。また、カメラ視線を基本としており、撮影される事を意識した写真群であるといえる。写真というメディアで記録されることで、後付で価値を付与されてきた、結果としての〈日常〉であ

る。被写体と撮影者のその〈とき〉を選び取った価値観が混在し、両者によって成長が跡付けられるのがこのような写真の特徴であろう。基本的に家族写真という枠組みの中にあり、家族の守られた視線の中で切り取られた写真といえる。くわえて、状況情報が極めて限られた人物焦点化型のポートレートとなっており、どうしてもリジー自身の表情や仕草が目がいっ仕掛けとなっている。

私的空間での写真でありながら、リジーの表情からは、意識してポーズを作った、①②⑤⑦⑧と自然体のポーズの③④⑥の2種類を見てとることができる。意識した中でも、ポーズをとる自分に自信をもっているかのような①の証明写真機の写真、ポーズを作りながらもはにかむような表情が見てとれる②、赤ちゃんとの記念撮影に神妙な面持ちの⑤、②と同様構える姿勢が見てとれるものの、どこか開き直った笑顔で、年齢的な成長を伺える⑧となっている。こうした写真構成から、リジーの写真は、外見的成長と内面的成長を強く意識させる内容といえる。その質の違いが学習者の中にリジー物語を立ちあげ、言語化を導き出すのである。

3.3.3. 写真を活用した言語活動

資料6に「リジーのポートレート」の学習活動を整理した。(1) それぞれの写真の内容に関するブレンストレーミング→ (2) ①第三者の視点やリジーの視点から写真の解説文を書く→ (2) ②映像化を意識し、BGMやナレーションを制作する、というように、8枚の写真を手がかりに、リジーという少女の日常や生活を学習者の想像で埋めていくという活動が行われていく。

写真読解から学習者が想像したリジー像は、次に、本人自身が語る8つのキャプションが加わることで、明確な内面性と、ある限定されたキャラクターへと焦点化される。

資料6 「リジーのポートレート」の学習活動を訳出²⁷⁾ (数字・記号等は筆者。必要な部分のみ抽出)

- (1) 次のページの写真(※引用者注-資料5)は、リジーという、14才の少女のアルバムの写真です。
- ①クラスで、リジーの写真についてブレンストレーミングしましょう。以下のことを考えましょう。
- それぞれの写真の状況は？例えば、フォーマル、インフォーマル、休日、特別な行事、家族写真、赤ちゃんのとき等々。
 - 彼女のポーズと表情から、何歳ぐらいなのか、どういう時間なのか。
 - 彼女の背景では何が起きているのか。
 - 彼女以外に誰が写っているのか。
 - 写真が撮られた理由は？例えば、証拠のため、お祝い、特別な瞬間や行事の記録、楽しみのため。

※後のページには、リジー自身によるキャプションが書いてあります。

②キャプションを読んで、どの写真についてなのかを考えましょう。

- (2) リジーのドキュメンタリー (グループワーク)
リジーの写真を使って短編ドキュメンタリーを作りましょう。
- ①受け手がリジーについてよくわかるように写真を選び、シーケンスを構成しましょう。次のような方法が考えられます。
- 自伝風-リジー自身が自分で自分の人生を語る
 - 伝記風-年代順に、あなたがコメントをいれる
 - フィクション風-第三者視点で物語を語る
- ※与えられた写真だけでは作りにくいと思うならば、絵を描くか、ことばで補いましょう。
- ②ドキュメンタリー用のサウンドトラックのための台本を作りましょう。以下のことについて考えましょう。
- 写真の一部に、または全部にあった歌や音楽。
 - リジーの写真に映し出されていない時期を文章でうめる。
 - リジーの生い立ちについて、カメラに向かって話をする形式でナレーションをつくる。
 - 解説をしたり、リジーとして吹き替えしたり等、それぞれの写真の重要性の説明をする。

※以上のことを、ナレーターとして、または、リジーの立場になって、考えてみましょう。また、他の人々からのコメントを入れることもできます。

- (3) ドキュメンタリーを見せ合おう (クラス活動)
- ①あなたのリジーフォトドキュメンタリーについてのアイデアを、クラスの人と見せ合ひましょう。
- ②あなたのフォト・ドキュメンタリーは、1人の人間としてのリジーに、公平な表現を与えることができますか。他にどのような方法がありますか。
- 他の写真が使える
 - 彼女をもっと知る
 - 彼女自身がもっと写真を工夫する
 - 他の誰かが彼女についてのドキュメンタリーをつくる。例えば、彼女の母親、彼女の家庭教師、彼女の親友、彼女の友達と彼女と話し合っ。

(4) 写真は真実を語るか？ (宿題)

①よく言われるのが「写真は嘘をつかない、が、写真家はそうではない」です。あなたはこの立場に賛成しますか？あなた自身の写真を使って、あなたの考えを少なくとも3つの理由をつけて答えましょう。

- (5) リジーのキャプション
- これは、私と母の友人。彼らは、私が赤ちゃんのとき、エイリアンのように感じた。
 - 私の新しい髪型を母が撮った写真。これは嫌い。
 - 私と生まれて3日の妹。
 - 妹に計算機の使い方を教えようとしているところ。でも、妹は全く興味なし。
 - 私とアニー。フォト・ブースで。
 - 私と新しいトレーナー。とても古いファッションに見える。
 - このメガネ、覚えている。とってもクールだと思っていた…。
 - 休日の目覚め。

外見の面に言及したC1「これは、私と母の友人。彼らは、私が赤ちゃんのとき、エイリアンのようだったと思った。」(写真⑥)、C2「私の新しい髪型を母が撮った写真。これは嫌い。」(写真⑧)、C6「私と新しいトレーナー。とても古いファッションに見える。」(写真②)、C7「このメガネ、覚えている。とてもクールだと思っていた。」(写真⑦)、妹への視線を感じるC4「妹に計算機の使い方を教えようとしているところ。でも、妹は全く興味なし。」(写真③)、客観的な表現にとどまるC3「私と生まれて3日の妹。」(写真⑤)、C5「私とアニー。フォト・ブース(証明写真機)で。」(写真①)、C8「休日の目覚め。」(写真④)、と、写真の価値付けのことも、質的な差異を持ったキャプションが用意されている。外見の価値付けは、「エイリアン」に始まり、メガネ、トレーナー、髪型と、成長するにつれ、他人事のようなことばから、自意識に対する葛藤のことばへと変化する。与えられたであろうメガネに対しては「クールだと思っていた」、当時は気に入っていたことを思わせる「古いファッションに見える」、ファッションへの目覚めとそれに対する気恥ずかしさが見え隠れする「これは嫌い」のように、現在の年齢に近づくにつれ、そのことばは直接的で感情的になる。

また、「エイリアン」という表現は、リジーの妹への視線を読み取らせるうえでも効果的であろう。写真⑤「私と生まれて3日の妹。」と写真③「妹に計算機の使い方を教えようとしているところ。でも、妹は全く興味なし。」の質の違うキャプションと重ね読むと、言語によって妹の捉え方の違いに気づかされていく。C5「私とアニー。フォト・ブースで。」、C8「休日の目覚め。」における客観表現の場合は、姉妹の2ショットとあいまって、穏やかで楽しげな両者の関係を様々に想像させる。客観的なキャプションをつけるに止めることで、一層、学習者が8枚の写真との関係の中で、状況を読み解こうとする視点を立ち上げるのである。

リジーの物語を創造し始めた学習者にとって、このキャプションは、一度、その物語から引き離される作用を持つ。写真を読解していた学習者は、おのずと、写し出された状況設定からリジーというキャラクターを造型する。そこに加えられたリジー自身の私的な思いの詰まったキャプションによって、学習者は、新たなリジーとの出会いを体験することになる。そこに生まれるズレは、学習者の葛藤を生み出し、読み手としての自身を再認識し、新たな興味・関心を持って、リジー像の造型に向かうことになる仕掛けである。

1枚の写真の語り手が、第三者であるのか、写真の登場人物なのか、リジーのように過去の自分を見る視点なのか。語り手を誰に据えるかで物語の語り出し方

は変化する。それは、ドキュメンタリーが、誰の視点によって語られるかで、描き方が変化することを学ぶことにも繋がる。またこれは、キャプションによっていかに写真の見え方が変化するのかを学ぶことでもある。視覚メディアは理解しやすいとの誤解を招きやすいが、写真のような静止画メディアは、付与される書記言語が写真そのものの読み方を決定づける場合も多い。学習者は、こうした映像(視覚)言語と書記言語の相互作用の効果をも、この学習によって学ぶことになる。

軸となるのは、「(4) 写真は真実を語るか?」における発問「写真は嘘をつかない、が、写真家はそうではない」である。この発問に対し、自分の意見を形成できる学習者を育成することがこの中単元「リジーのポートレート」の目的となる。リジーの写真を材料にブレンストーミングを行うなど、情報を散々再構成してきた学習者にとって、写真内容の真偽は最早興味の対象ですらない。写真で切り取られた時空間の詳細な内容を判断できるのは、その場に居合わせたものだけ(それさえも多様な視点を生む可能性はあるが)であることを学習者は理解し、また、「写真」という事実は、説明者の手によっていかようにも変容することも学習者は理解していくのである。

3.4 「リジーのポートレート」及び「Photo-You」のまとめ

これまでの考察から、写真、特にポートレートを活用した読解活動において以下の特徴があきらかになった。①観点(状況、時間、ポーズ、表情、背景、人物、撮られた理由)を提出されることで全体的な印象ではなく部分への着目から写真をよみとることができること、②写真に写し出されているのは人生の断片であることを知ること、③断片からでも、ポートレートというメディアの性格上、人は自らの体験と重ねることで豊かに読み取ってしまうこと、④同時に、自分自身の人生を見つめさせることに繋がること、⑤自分の場合はどういった断片を提供し、どのようなことばを加えていくかを考えていくこと、⑥写真にことばが付与されることで意味内容が変化することを知ること、というように整理できる。

リジーと名づけられた少女の写真がどのような経緯で教材化されたかを知ることはできなかった。しかし、学習者と同年代の少女が読解対象として提示されることで、多様な言語活動が可能になることは理解できた。ただ、この写真を提示され、読みが立ち上がるのは、彼女と同じ文化の中にある少年少女であろうことも想像が付く。数年前に大学の授業の中で「リジーのポートレート」を提示したが、学生達が読解に苦勞し

ていたことがある。そこには、これまで写真を読解したことがない、リジーの写真に何らかの共感を抱くことができなかった等々、様々な要因が考えられる。同じ写真読解でも、ピューリッツァー賞をとった写真を読解するという単元が他のメディア教科書にはあった。そうした活動に比べるとポートレート読解は読む観点が乏しいように感じる。しかし、これが、ドキュメンタリー読解の導入であるとするならば、これほどまでにドキュメンタリー性を意識させられる素材はない。ひとりの少女の生い立ち、いわばアルバムを見る行為は、まさしくドキュメント性に富んだ行為であろう。

作り手の意図で時空間が切り取られた写真は、さらに第三者の意図でつけられたキャプションによって意味が変容していく。これを踏まえ、学習者は、次中単元で、フォト・ブース（証明写真ボックス）を舞台とした短編ドキュメンタリー番組の分析に取りかかることになる。ドキュメンタリーは、証明写真ボックスの仕組み、設置する側の思い、利用者のさまざまな使い方の様子とそのインタビューというように、会社（生産者）側と利用者（消費者）側、両者の観点からの記録映像となっている。学習者は、その映像を分析しながら、ドキュメンタリーもまた、写真同様、目的に応じて映像を選び取り、再構成しているという基本的な仕組みを学ぶ。それによって学習者は、他者としての〈私〉と切り取られる〈私〉の双方を意識させられていくのである。

写真を活用した言語活動を豊かにするには、写真のメディア特性の理解とともに、写真の読解方法を学習者が会得しておくことが重要である。レイアウト、色、ポーズ、表情といった表現上の読解観点だけでなく、どのような距離、角度、位置から撮られたかを推測する力も読解には役に立つ。今どきの学習者であれば、小学生であっても写真を撮る行為は日常的であろう。親のカメラ付き携帯電話を操作して写真を撮る姿も街中でよく見かける風景でもある。画面をタッチするタイプのスマートフォンカメラであれば、幼児でも容易に意識的な撮影を行うことができる。こうした日常的表現行為は、子ども達のものの考え方や言語行為の手法に少なからず影響を与えている。こうした日常的行為を学習の場に取り立てる、そのひとつとして、写真の活用は比較的今の教室の場に持ち込みやすいメディアなのではないだろうか。

東京書籍中学校2年生に「小さな労働者」という単元が「情報の再構成について学ぶ」ことを目的に用意されている。これは、写真家が、児童の不当な労働からの解放を訴えるため「フォト・ストーリー」という手法を用いたことを伝える「伝記」または「ノンフィ

クション小説」とでもいうべき教材である。今回取り上げた単元「Photo-You」と重なる点が多いと感じている単元である。また、砂川（2011）²⁸⁾では、本文と掲載写真の詳細な分析を行い、メディア学習を行うに適した教材であるとの評価を与えている。しかし、「小さな労働者」が情報活用単元であることがあまり重視されず、説明文教材として「読まれる」という現実がある。今回取り上げた「Photo-You」の方法論は、そうした説明文教材扱いにならないための単元の作り方に示唆を与えるものだと考えている。

「リジーのポートレート」から始まる単元の作り方は、「教材文」+「てびき」という順序で作られる我が国の伝統的な教科書教材のあり方とは違い、誌面に掲載されている「発問」や「学習活動の指示」が学習者の多様な言語活動を引き出す、自学自習が可能な教科書となっている。また、学習者と同じ14歳の少女の「ポートレート」を持ち込むことで、「写真」というメディアを、事実の再構成を、自分のこととして捉えることができる。このような教材選択の手法は我が国の教科書作りの中では難しい。特に、リジーのような、特定の無名の誰かの写真を使うことは、様々な意味で難しい。イギリスの教科書には、企業名が入った商品や作品が当たり前のように扱われている。このような状況が生み出せて初めて、日常的教材、社会的教材を対象とした学習が可能になるのではないだろうか。

とはいえ、与えられた制限の中で、例えばどのような写真であれば学習者の意識を揺さぶることが出来るのか、言葉との組み合わせで印象が変わる写真とはどのようなものなのかをより吟味し、一般化し、教材としての写真には、どのような要素が必要なのかを全ての教師が理解しておく必要があるだろう。

4 おわりに

我が国における言語外メディアの読みを導入した国語科学習に示唆を得るため、“The Media Book”の大単元6「Photo-You」の考察・検討を行ってきた。

大単元6「Photo-You」が国語科に位置づけられるのは、「NLS」において、「9. CGアニメーションで使われる音と画像のように、テクノロジーを使って表現される方法を確かめること。」等、言語外メディアの学習がカリキュラムの中に位置づけられているからである。しかし、カリキュラムができたことで学習活動が生まれたのではなく、すでにあった学習活動をあとから出来たカリキュラムの中に位置づけたのが“The Media Book”の方法論である。では、先にあった学習活動の理論はどこにあるのかと言えば、Cary

Bazalgette の6アスペクト²⁹⁾に行き着く。

メディア・リテラシー教育の特性は、扱う教材が、日常的・社会的メディア・テキストであることが大きい。そのことが、制作者や目的を明確化することにつながり、「表現されたもの」は全て誰かによって発信されていることを理解することに繋がるのである。我が国の国語科教育に欠けているのは、教材を客観視する視点に子どもをおく学習方法のあり方ではないだろうか。客観的な視座がなければ、情報を主体的・批判的に見つめることも難しい。子どもをとりまく情報は、親や社会の監視の目が行き届かない状況にある。しかし、情報を遮断する方法を手繰るのではなく、情報にいかに向き合うのかを考えることの方が得策であり、そのためには、言語外メディアの読みを国語科に導入することで、情報の読み方を学ばせることが効果的であると考える。

【注】

- 1) 2011年時点で English & Media Centre 発行の Media Magazine 編集者。
- 2) ロンドンの中高等教育学校、大学で13年間教えた後、2002年からUniversity of Southampton School of Education に所属。Panic Attacks (EMC, 1998) 執筆等、1996年以降、国語科におけるメディア教育に携わってきた。
- 3) 1988年に初めてのナショナル・カリキュラムが制定。今回対象とした「NLS」は1999年改訂版ナショナル・カリキュラムの実施細目。
- 4) DfES. (2001). *Framework for Teaching English Years 7-9*
<http://www.standards.dfes.gov.uk/secondary/keystage3/respub/englishframework/>
「イギリスでは現在、国民の言語生活の向上、また、国際競争力育成のために、義務教育において必須のリテラシー獲得を保障する国家的教育制度を推し進めている。その核となっているのが「全国リテラシー指導方略指針」である。」(松尾澄英「イギリス前期中高等教育における文学教授プログラムの考察」(第110回岩手大会発表資料)より引用。
- 5) BFI (英国映画研究所) とともにイギリスにおけるメディア・リテラシー教育を牽引する団体。元教師によって構成され、政府の委託を受け、学習カリキュラムの開発や提言を行っている。
- 6) イギリスでは義務教育段階を4段階に分けている。キーステージ1 (5~7歳)、キーステージ2 (7~11歳)、キーステージ3 (11歳~14歳)、キーステージ4 (14~16歳)。
- 7) “The Media Book” (2001), “The Poetry Book” (2001), “The Non-Fiction Book” (2001) “The Fiction Book” (2002), “The Drama Book” (2003). The Poetry Book, The Media Book, The Non-Fiction Book and Videos は、Education Show Resources Award (2002): Best Secondary Resource を受賞している。
- 8) 瀧口美絵 (2011) 「メディア教育史研究—国語科メディア教育の構築に向けて—」広島大学大学院博士論文
- 9) 例えば、「写真」の場合、小学校中学年「話すこと・聞くこと」の「言語活動例」に「ウ図表や絵、写真などから読み取ったことを基に話したり、聞いたりすること。」と「話すこと・聞くこと」領域ではあるが、「写真」が「読み取」の対象として明記。他にも「書くこと」の材料として「写真」が「資料」のひとつとして明記。「新聞」は、小学校高学年「読むこと」の言語活動例「ウ編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。」と明記。また、「解説編」(p.112)には、「新聞は、多数の人々や広い範囲に配布されるメディアとして編集され、社会・経済・政治・産業・国際・教育・文化・スポーツなど多岐にわたる内容が取り上げられている。編集に当たっては、活字や図、写真などの大きさや行数、配置などを決める割り付けなどが行われている。記事は、逆三角形の構成と呼ばれることもあるように、結論を見出しで先に示し、リードから本文へと次第に詳しく記述されている。また、事件や出来事の報道記事だけでなく、社説・コラム・解説などの記事もある。このような特徴を理解し、編集の仕方や記事の書き方に注意して読むことが大切である。」とあり、新聞のメディア特性も含めて読みの対象であることが示されている。
- 10) 例えば光村図書の場合、説明文だけを見ても、「しかけカードの作り方」(2年下)、「天気を予想する」(5年)のように写真、図表を含む文章の読み方、書き方を学ぶ単元や、「『鳥獣戯画』を読む」(6年)のように、絵の読み方を学ぶ単元が増設された。また、東京書籍の「広告と説明書を読みくらべよう」(4年上)も新たに追加されたメディア単元として顕著な例といえる。
- 11) 正確には「イングランド」であるが、本論文では、これまでの比較国語研究論文の慣例に従い「イギリス」と表記する。
- 12) 注釈には、「マルチモーダル・テキストとは、2つかそれ以上のコミュニケーションのモード(例えば、書記言語、音声、視覚)の結合によって意味を作り出しているものを言う。」(『English: Programme of study for key stage 3 and attainment targets (This is an extract from The National Curriculum 2007)』, p.65)との説明がされている。
- 13) 1933年設立。イギリスの映画文化振興を目的に活動する団体。教育部門は、カリキュラムの提言、教員研

- 修, 教材開発を行い, イギリスのメディア教育を牽引する。
- 14) 羽田潤「短編映画を活用した読解学習の研究—単元『[Out]: 動画を読む (“The Media Book”, EMC, 2001) を中心に—」, 大阪国語教育研究会編『小田迪夫先生古希記念論文集』, (2008.5), pp.257-268, 羽田潤「アニメーション番組を活用したリテラシー学習の研究—単元『[シン普森ズ] を研究する (“The Media Book”, EMC, 2001) を中心に—」, 大阪国語教育研究会編『野地潤家先生卒寿記念論文集』, (2009.4), pp.242-301等。
- 15) 第112回全国大学国語教育学会宇都宮大会において, 第7学年を対象とした大単元1「Out」, 大単元2「テレタビーズに取り組む」, 大単元3「Home Away From Home」, 第113回岡山大会では, 第8学年を対象とした大単元4「シン普森ズを研究する」, 第115回福岡大会では大単元5「Selling you (th)」, 第117回愛媛大会では大単元6「Photo-You」, 第61回中国四国教育学会では大単元7「Celebrity!」, 言語文化特別研究(2009.12)及び大阪国語教育研究会(2010.3)では大単元8「Big Brother TV」, 言語文化特別研究(2010.4)では大単元9「Patterns」について口頭発表を行った。活字化したものには以下のものがある。
- 羽田潤(2008)「短編映画を活用した読解学習の研究—単元『[Out]: 動画を読む (“The Media Book”, EMC, 2001) を中心に—」, 大阪国語教育研究会編『小田迪夫先生古希記念論文集』, pp.257-268
- 羽田潤(2009)「アニメーション番組を活用したリテラシー学習の研究—単元『[シン普森ズ] を研究する (“The Media Book”, EMC, 2001) を中心に—」, 大阪国語教育研究会編『野地潤家先生卒寿記念論文集』, pp.242-301
- 16) 「Jenny Grahame インタビュー」(松山雅子翻訳)より引用。2010.11.23に The English & Media Centre において松山雅子を中心にインタビューを行った。同行者は筆者と内田佳実(大阪教育大学院生: 2010年当時)。
- 17) English & Media Centre から彼女が出版した教材は, これまでもメディア教育に特化したものであった。“The Media Book”も彼女のこれまでの仕事の延長線上に位置づけられる。彼女の仕事の中でも特に注目すべきは, “Picture Power”である。パソコンソフトを用いた簡易編集活動の提案は, 「制作」理解の方法としてのわかりやすさを学習者に提供した。“The Media Book”でも, “Picture Power”を用いた学習活動が提示されている。
- 18) D. Buckingham, Jenny Grahame, Julian Sefton-Green “Making Media-Practical in Media Education”, EMC, 1995等。
- 19) ロンドン大学教育学研究所, Centre for the Study of Children, Youth and Media 教授。
- 20) D. バッキンガム著, 鈴木みどり監訳『メディア・リテラシー教育—学びと現代文化』(世界思想社, 2006年12月25日刊 p.88)「4つの基本概念」とは, 「制作」「言語」「オーディエンス」「リプレゼンテーション」である。これは, C. バザルジェット (Cary Bazalgette: 2011年8月時点では, Media Education Association (MEA) 会長。1989年当時は BEI 教育部門長) が “PRIMARY MEDIA EDUCATION A CURRICULUM STATEMENT” (BFI Education Department, 1989) において提唱した「メディア・エデュケーションの6つの基本アスペクト」(①メディアの発信母体: media agencies, ②メディアの類別: media categories, ③メディアの技術: media technology, ④メディアの言語: media languages, ⑤メディアの受容者: media audiences, ⑥メディアの象徴性: media representation) をより単純化したものである。
- 21) 「テレタビーズ」は, ロシアのテレタビーズについて取材した情報番組の一部が収録。「シン普森ズ」は商品 DVD のパッケージ画像のみで作品は収録されていない。
- 22) 教科書に添付の DVD に PDF ファイルで “Teacher’s Note” が収録されている。
- 23) Photo-You Teachers’ Notes, EMC, 2001, pp.3-4を訳出。
- 24) 注16) に同じ。
- 25) “Teacher’s Note” 等に, 写真の説明や教材としての選択理由は示されていない。事実がどうであるかではなく, 何をどのように読みとることができるのかがここでの課題である。
- 26) 日本語にすると肖像写真, 人物写真ということになる。プロが撮ったものでも, 素人が撮ったものでも人物写真であれば「ポートレート」となる。本単元では, 自分ならどのような写真を撮るのかといった, 「セルフポートレート」を意識させるために「リジーのポートレート」を活用している。
- 27) “The Media Book” p.73, p.75を訳出。
- 28) 砂川誠司(2011)「国語科におけるメディア・リテラシー観の探究」広島大学大学院博士論文
- 29) 注20) に掲げている「メディア・エデュケーションの6つの基本アスペクト」